

バーチャル湯島聖堂

木村 浩

湯島聖堂の大成殿をバーチャル空間に再現することが、今回の研究目的である。

湯島聖堂は、元禄三年（一六九〇）七月に綱吉の発意により造営された儒学の学問所である。建築にあたったのは、奉行松平輝貞、小普請方大工棟梁依田伯耆忠直であった。

元禄一六年（一七〇三）に最初の焼失があり翌年に再建された。その後二度の江戸の大火、関東大震災、第二世界大戦時の空襲によって焼失・改修を繰り返して現在に至るが、もともとは寛永九年（一六三二）徳川幕府の政治顧問であった林羅山が上野忍が岡（現在のの上野公園）に建てた孔子廟「先聖殿」を改築したものである。

綱吉は先聖殿を「大成殿」と改称し、またそれに付属する建物を含め「聖堂」と総称した。建物全体は朱塗りにして青緑に彩色したと記録に残されている。

現在の湯島聖堂は、大正一二年（一九二三）の関東大震災で全焼した後、昭和一〇年（一九三五）に入り母屋造り両端に青銅製の鬼狛頭・鬼龍子を置

いた屋根も配置した鉄筋コンクリートで再建されたものである。

湯島聖堂の復元にあたり、江戸時代の湯島聖堂のイメージを調べた。『昌平志』に記録されているイメージ図（挿図1）と『江戸名所図会』に掲載されている湯島聖堂イメージ図（挿図3）とを見比べると大きく異なっている。『江戸名所図会』は天保五年（一八三四）一七年の出版でその当時の外観イメージであろう。

今回の再現は、初期の湯島聖堂の復元であり『昌平志』の資料を基にした。当時の建築を理解する上で参考となるものとして、現在も残っている多久聖廟の保存修理の報告書を参考にした（挿図5-8）。多久聖廟は、宝永五年（一七〇八）多久四代、多久茂文が「治と教」を目的として建てた孔子廟である。

『昌平志 巻第二』には、諸像の位置についての記述とともに、その配置図も挿入されている（挿図2）。旧湯島聖堂大成殿は、南に面して建てられ、幅五間五尺（約一〇・五m）奥行三丈七尺五寸（約一一m）、高さ四丈三尺三寸（約一三m）のほぼ正方形の建物で、さらにその左右に幅三間（約五・五m）奥行一丈九尺五寸（約六m）の張り出しがついており、上から見ると凸の字を逆さにしたような構造をしていたようである。大成殿北壁の中央、すなわ

ち大成殿奥には、神座と呼ばれる小室が設けられていた。この室は高さ五尺八寸（約一・八m）奥行六尺五寸（約一・九m）で、手前には七段の階段と手すりがあった（挿図2）。そしてこの神座に諸聖像が安置されていた。

『昌平志』にある「大成殿図」のイメージ図（挿図1）を見ると、屋根は、入り母屋造りで正面の軒先に唐破風の表現があり、また正面屋根の上部中程に屋根が飛び出している。この図にあるような屋根を持つ建物は『江戸名所図会』にある神田明神寺本社（挿図4）に見ることができた。この神田明神寺は湯島聖堂とは隣接する施設であり今後調べてみたい。挿図1にみる唐破風の軒は、多久聖廊や神田明神寺の様に向拝として飛び出していたのではとも考えられるが、図からは読み取れない。

正殿は中央部を挟むように西廡と東廡が設けられていて上から見ると凸を逆さにしたような形になっている。このように両廡のあるものとしては多久聖廟がある。しかし、多久聖廟は両廡も大屋根の下に含まれているので屋根のつくりは大きく異なる。

『昌平志』の記録によると高さが一三mとはずいぶん高く塔の様である。この高さから内部の天井も高いと考えられ、多久聖廟の天井を参考にした。

『昌平志』の湯島聖堂サイズ表記（一尺＝三〇三mm）

| | | | |
|-------|------|---------------|------------|
| 正殿 | 中央間口 | 五間五尺（三五尺） | 一〇・六〇五mm |
| | 奥行 | 三丈七尺五寸（三七・五尺） | 一一・三六二・五mm |
| | 高さ | 四丈三尺三寸（四三・三尺） | 一三・一一九・九mm |
| 正殿内神座 | 奥行 | 六尺五寸（六・五尺） | 一・九六九・五mm |

高さ 五尺八寸（五・八尺） 一・七五七・四mm

両廡

両各横 三間（二八尺） 五・四五四mm

奥行 一丈九尺五寸（一九・五尺） 五・九〇八・五mm

両廡北壁棚

高さ 二尺五寸（二・五尺） 七五七・五mm

まず柱位置を検討した。『昌平志』の表記してあるサイズを柱の芯として捉えることとし、柱の位置を決めた。一般的には等間隔に柱を配置するが、サイズ表示からは不規則な間隔となった。柱の径は、中世になって古代よりも細くなっていたようで、柱間の一二%位が多く見られるとのことなので、中央部の柱は円筒形で直径四〇〇mm、両廡の柱は円筒形で直径三〇三mmとした（挿図11）。

柱の長さ（斗栱までの高さ）は、中央部の四〇〇径の柱の手前と奥をグラウンドレベルから六三四〇mmとし、中央部はグラウンドレベルから八〇〇〇mmとした。中央部の長さは図から読み取ることができないが、高さのある建物なので多久聖廟を参考にした。

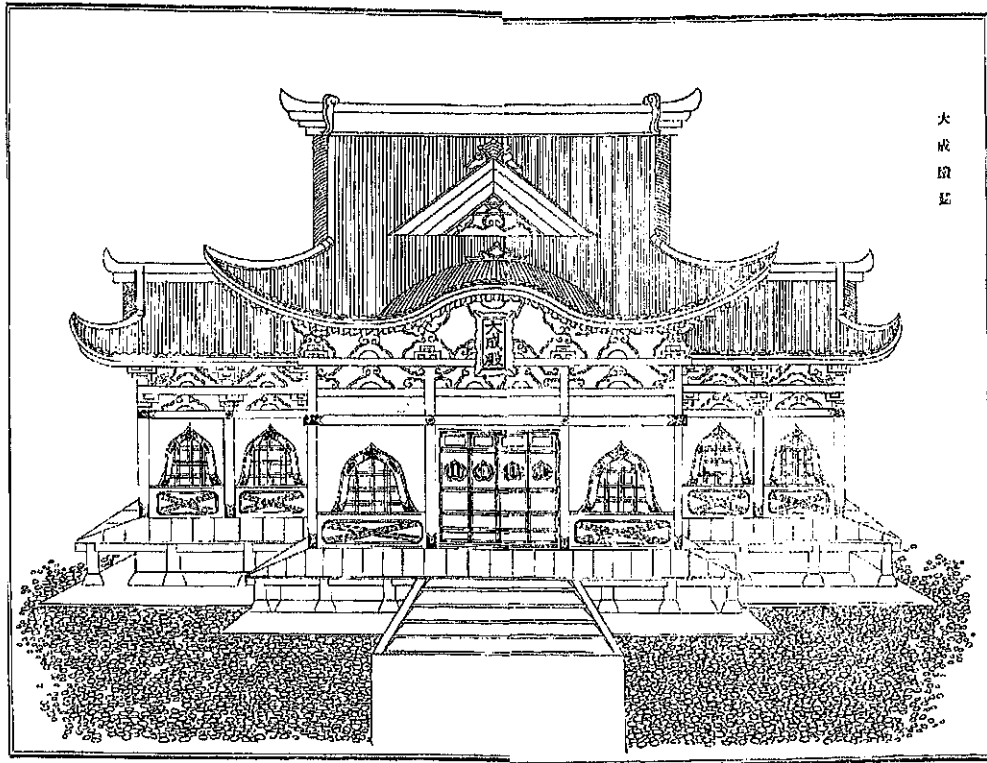
今回作成したバーチャル湯島聖堂は大凡の外観イメージの作成に留まっている。柱と屋根の間にある重要な構造である斗栱の具体的なサイズの検討は今後の課題とする。梁の位置やサイズについても曖昧になっている。

今後の課題は、建築の部材などの様式やデザインの検討であり、より詳細な調査が必要となる。

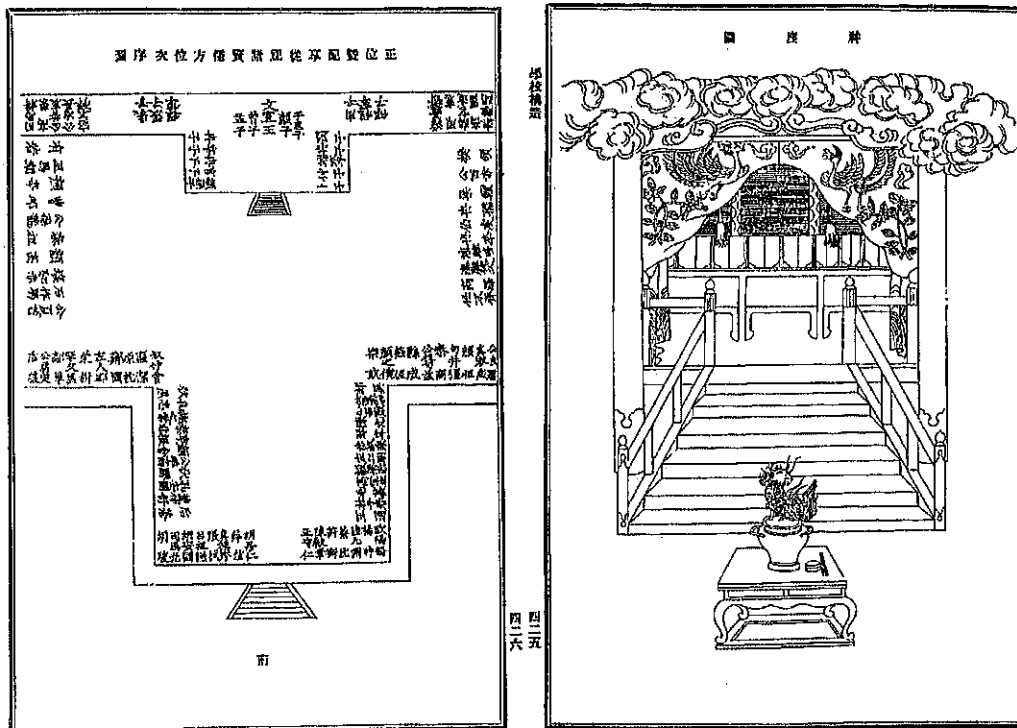
参考文献

- 前久夫『寺社建築の歴史図典』東京美術二〇〇二年。
大森健二『寺社建築の技術：中世を主とした歴史・技法・意匠』理工学社一九九八年。
建築資料研究社設計構造課編『神社仏閣図集 第1―3巻』建築資料研究社一九九二年。
前久夫『社殿のみかた図典』東京美術一九八一年。
斎藤幸雄『江戸名所図会 5・6』新典社一九八四年。
堀内仁之『東京の寺社建築：様式と技法』理工学社一九九一年。
文化財建造物保存技術協会編『重要文化財多久聖廟保存修理工事報告書』多久市一九九一年。
相川浩『日本の名建築をあるく―雰囲気的美学』ちくま親書一九九八年。

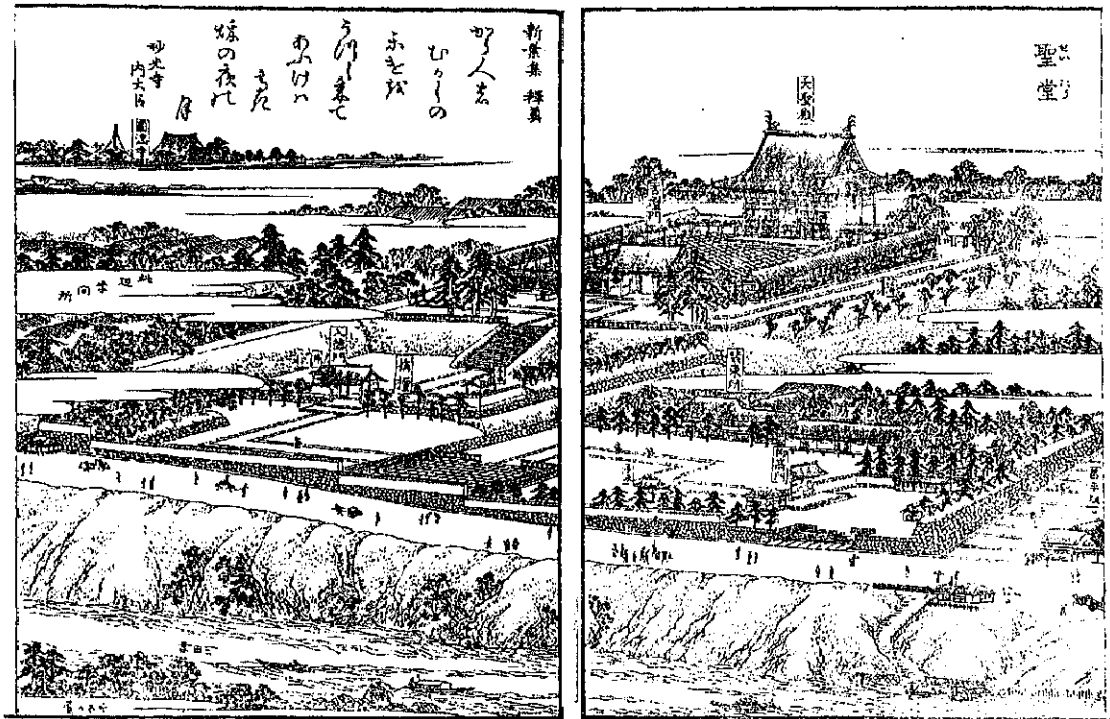
挿図1 『昌平志』の大成殿図



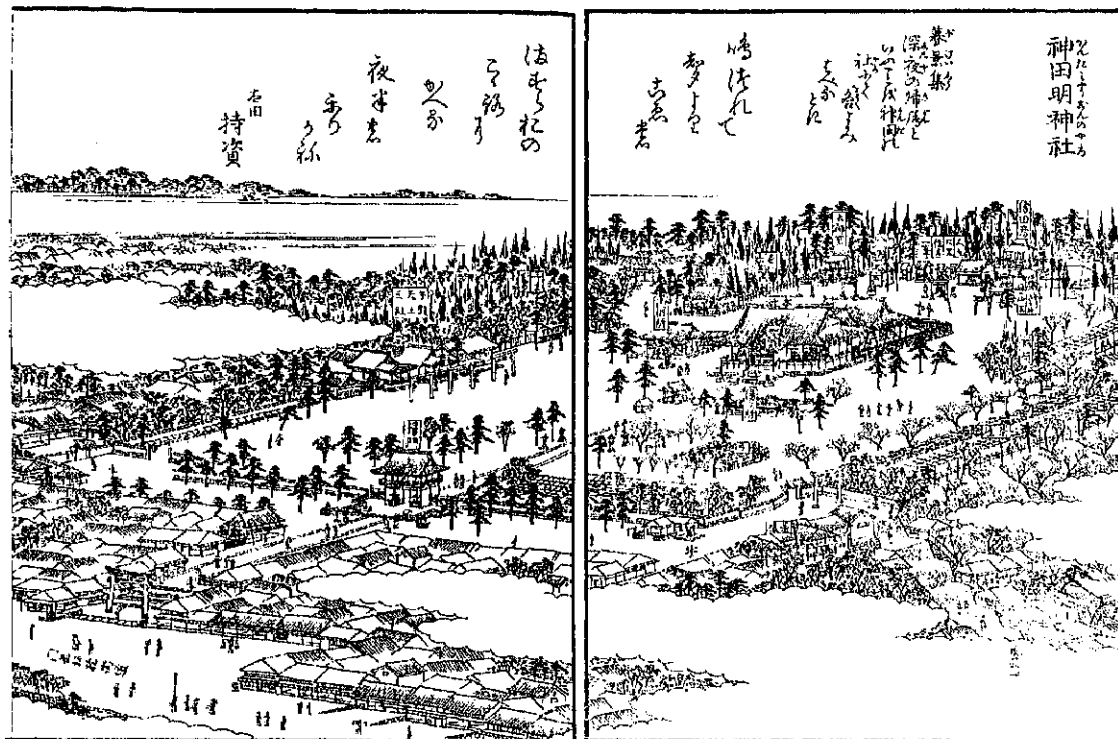
挿図2 『昌平志』の神座と配置図



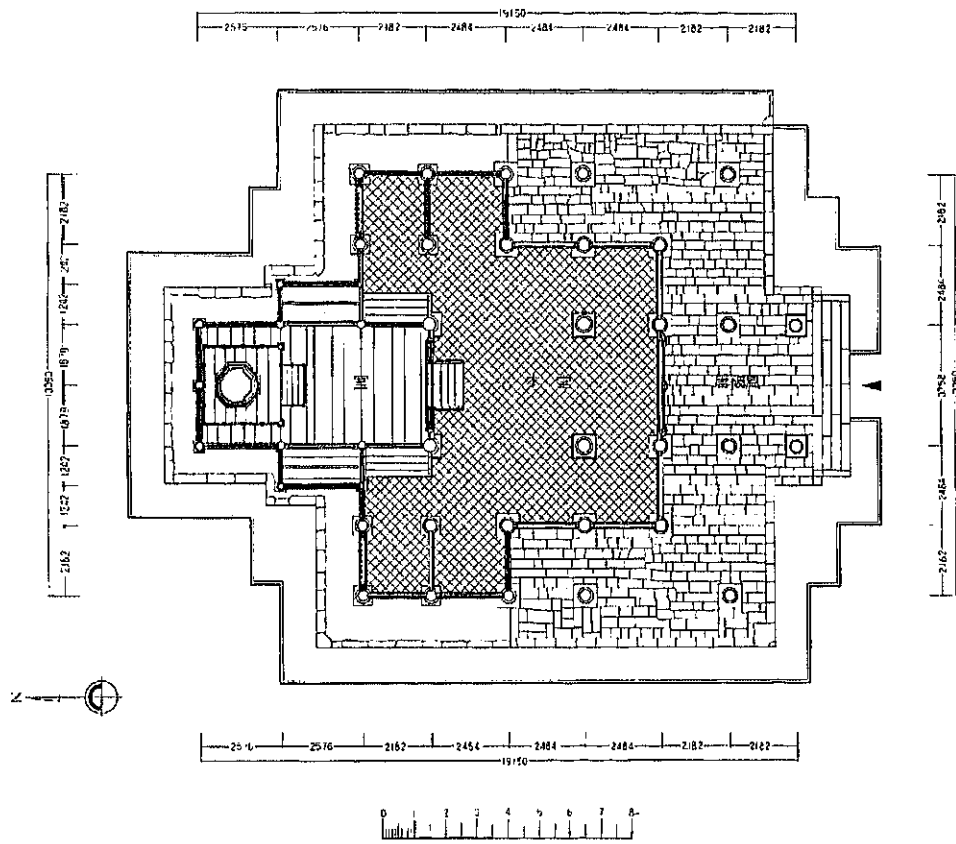
挿図3 湯島聖堂 (『江戸名所図会』より)



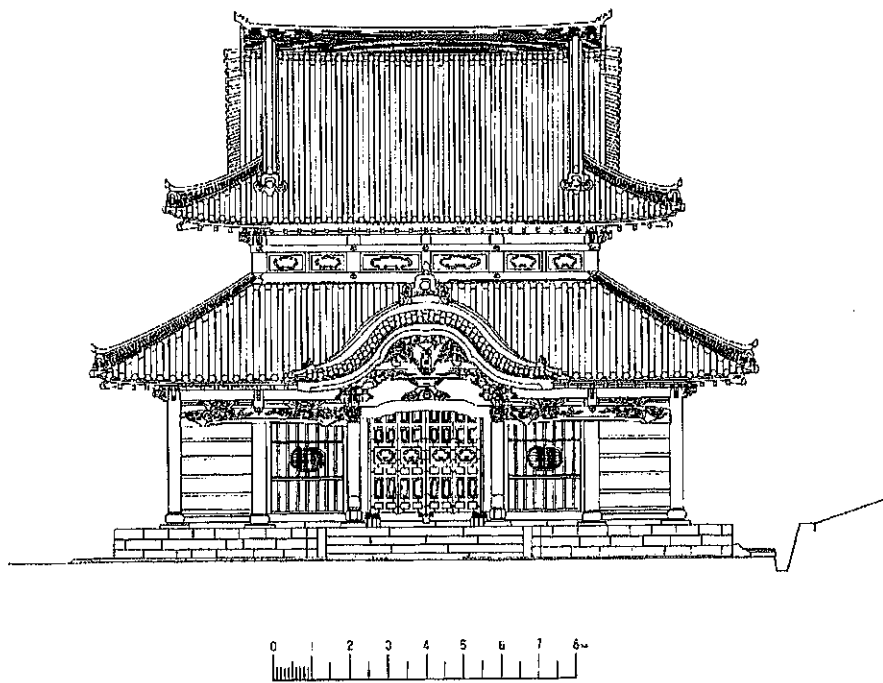
挿図4 神田明神寺 (『江戸名所図会』より)



挿図5 多久聖廟の平面図

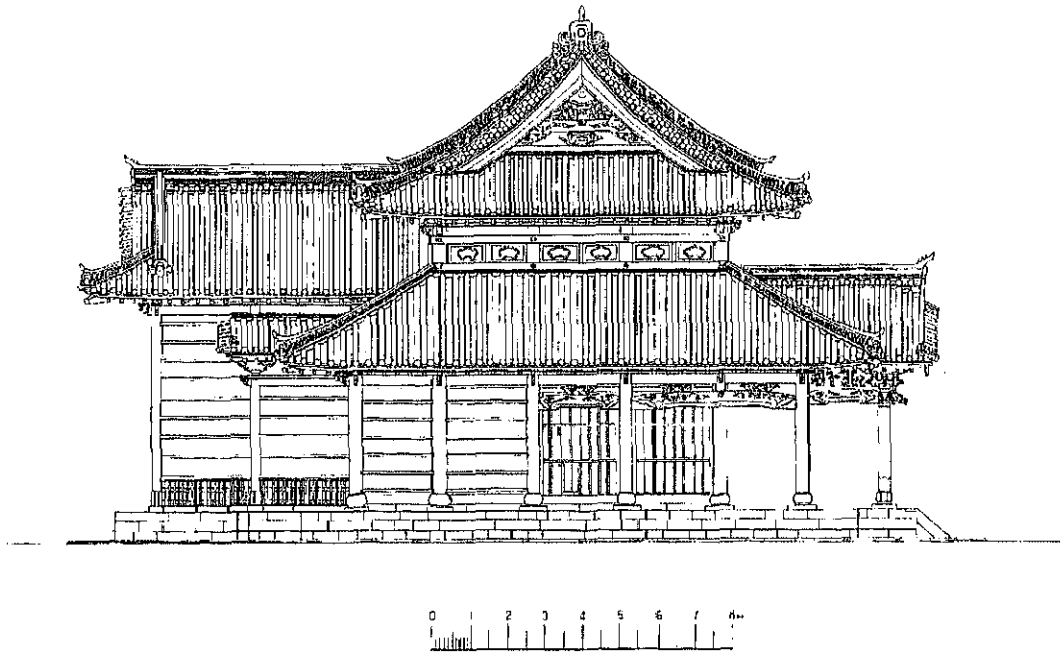


挿図6 多久聖廟の正面図



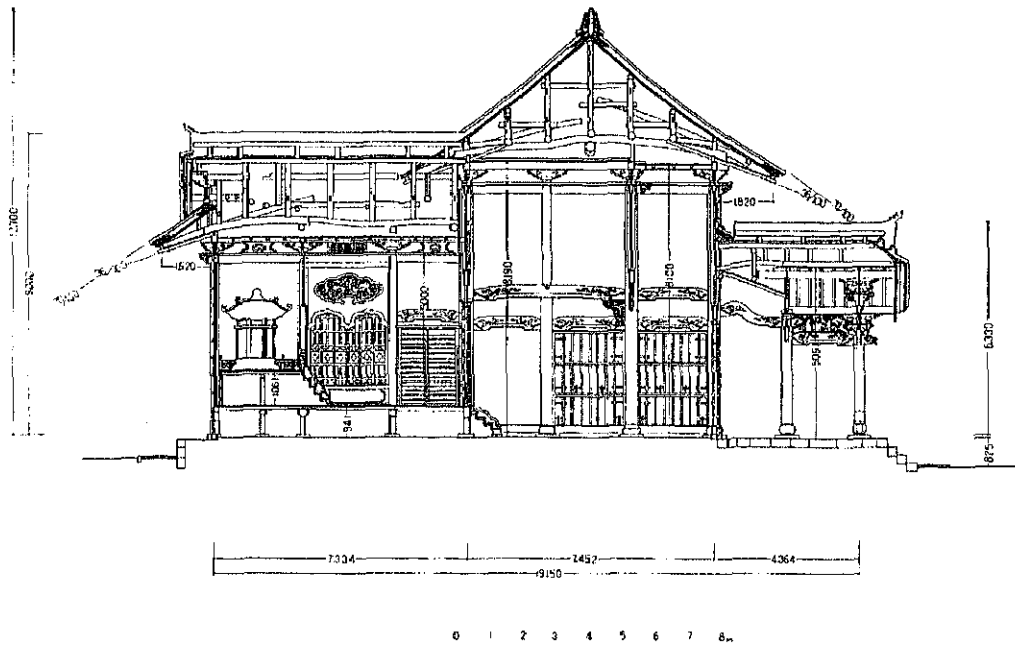
竣工正面図

挿図7 多人聖廟の西側立面図

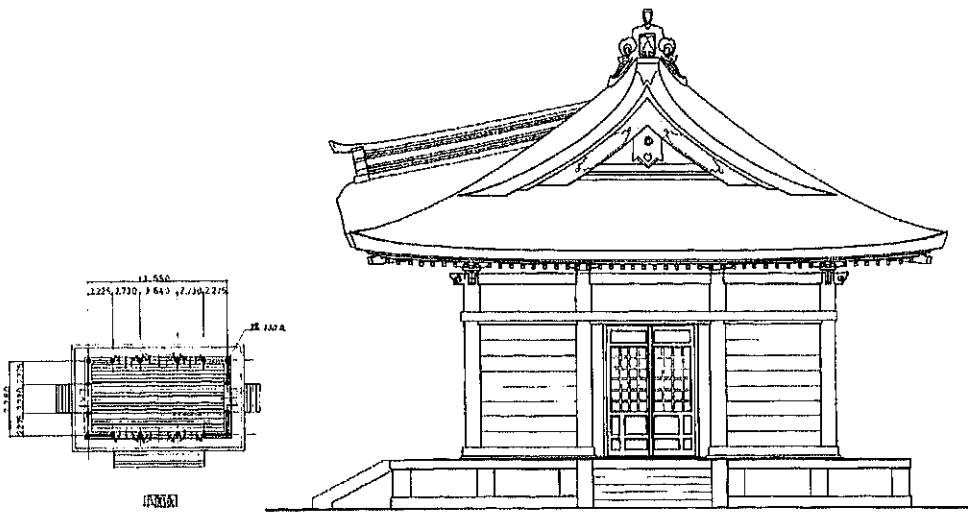


多人西側立面図

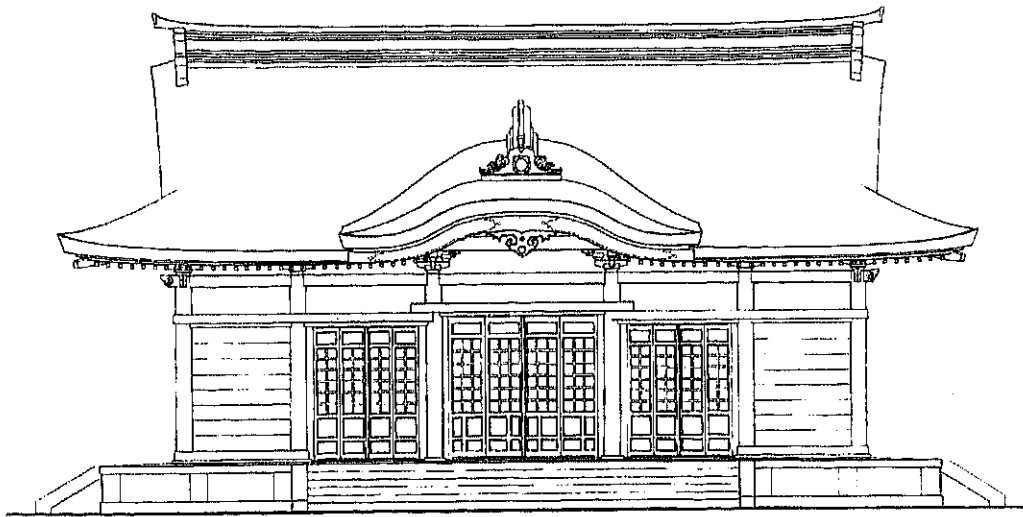
挿図8 多人聖廟西側断面図



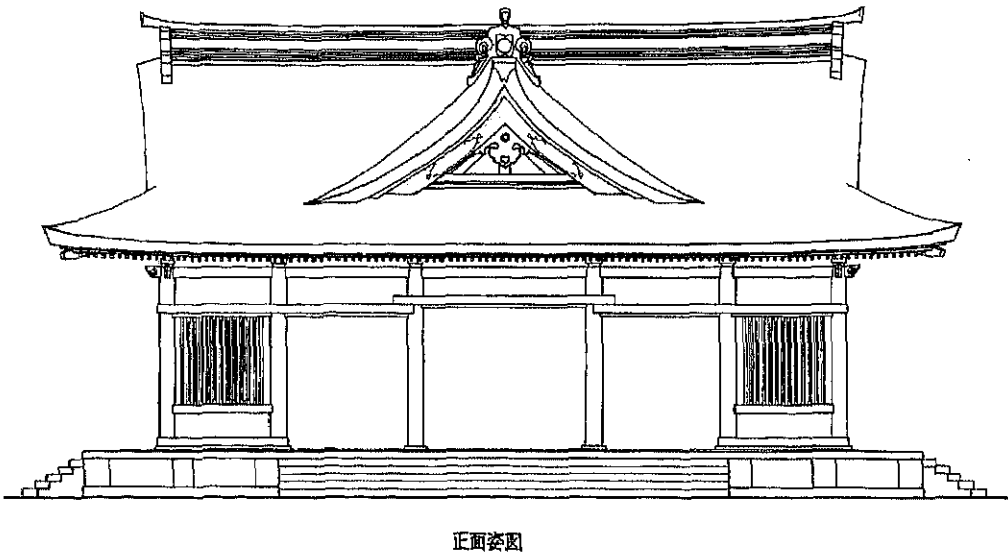
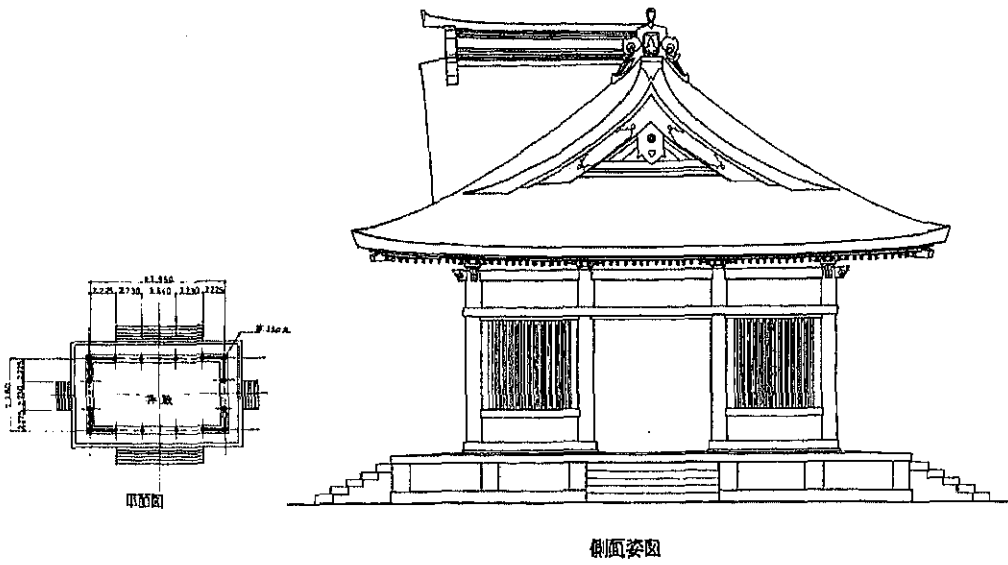
挿図9 入り母屋造り軒唐破風付の例 (『神社仏閣図集』 建築資料研究社 一九九二年より)

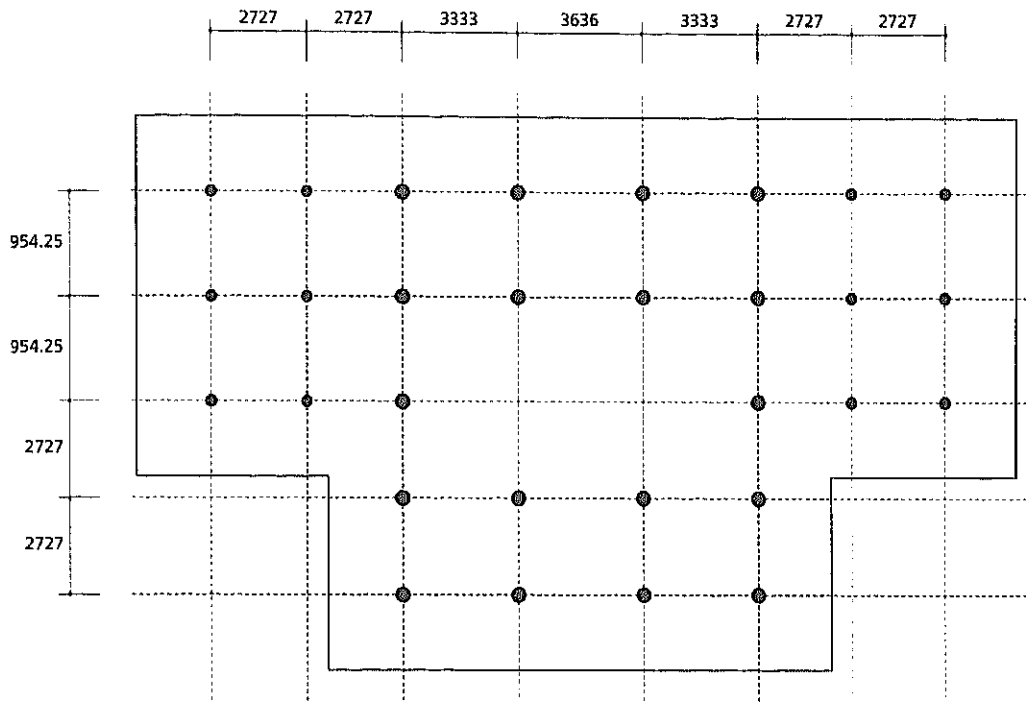


側面姿図

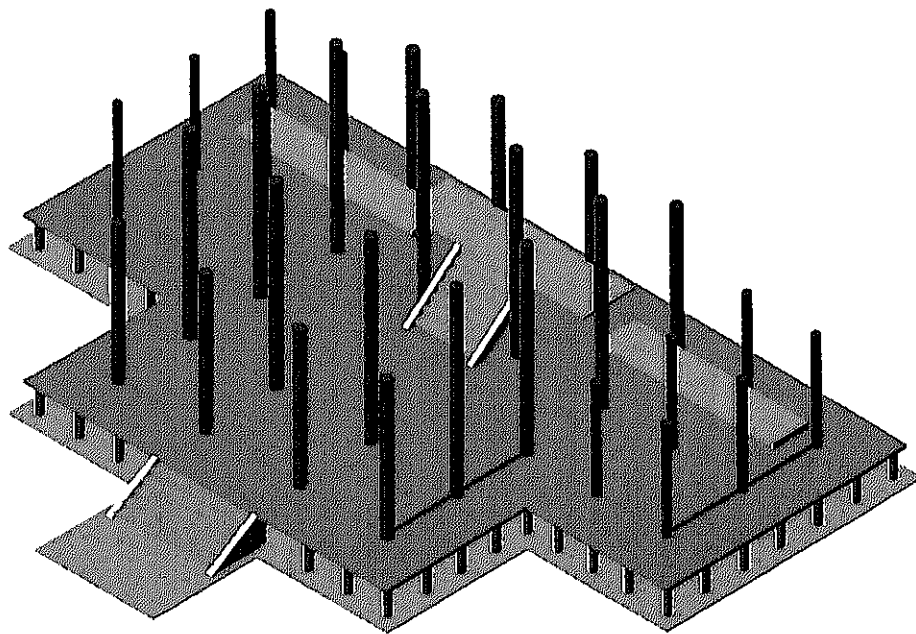


正面姿図



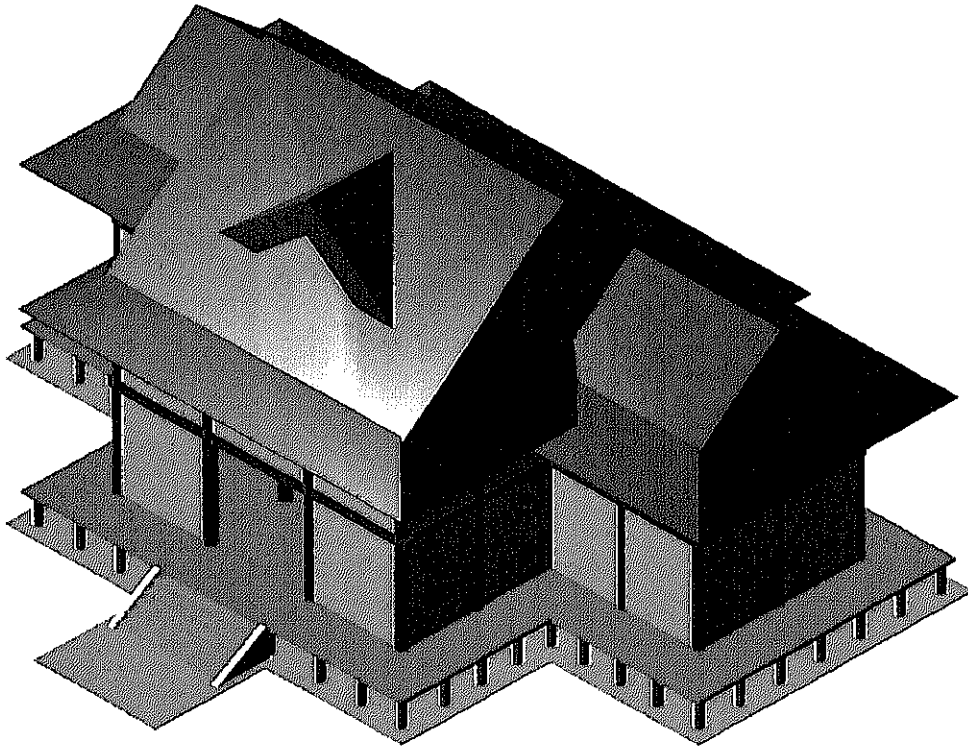


挿図11
バーチャル湯島聖堂の平面図



挿図12
バーチャル湯島聖堂

挿図13
バーチャル湯島聖堂



挿図14
バーチャル湯島聖堂

